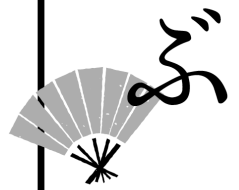


古典落語



に学



落語家
立川談四楼

第三十三回 おすわどじん

あせ
浅

草阿部川町の呉服商、上州屋徳三郎と女房の「おそめ」は人も羨む仲睦まじい夫婦だったが、おそめは病であっけなく死んでしまう。

徳三郎は嘆き悲しむが、一周忌が過ぎた頃、親類縁者は再婚を勧める。相手は店の台所で働く女中の「おすわ」で、氣立ても器量もよく、「おすわどん」と店の者に呼ばれ、評判もいい。おすわとは気心も知れているし、おそめも可愛がっていたので許してくれるだろうと後添い（後妻）にし、徳三郎とおすわは以前にも増して仲のいい夫婦となった。

しばらく経った冬の晩、小用に立った徳三郎は、表の戸を「パタパタ、パタパタ」と叩く音を耳にし、続いて「おすわど

くん、おすわどくん」という声を聞いた。

その夜は気にも留めなかったが、それからというものの毎夜、「パタパタ、パタパタ」「おすわどくん、おすわどくん」が続き、徳三郎は先妻のおそめが恨んで出て来たのかと思うようになった。

や

がて「パタパタ」と「おすわどくん」は店の者たちやおすわ当人にも聞こえるようになり、おすわは気に病んで寝込んでしまった。「誰か表の様子を見てきておくれ」と言っても、店の者は誰もが怖じ気づき、番頭などは「様子を見に行くくらいならお暇をいただきます」と言い出す始末。徳三郎自身も見に行く勇氣はない。

徳

三郎はこのままではおすわにも店にもよくないと、町内の柳生（江戸時代の剣豪）の流れをくむと言われる荒木又スレ先生に幽霊退治を頼み込む。さすがは武士の端くれ又スレ先生、二つ返事で承諾して上州屋に乗り込み寝ずの番を務めることとなる。

やがて又スレ先生の耳に「パタパタ、おすわどくん」が聞こえ、抜刀した又スレ先生、戸を開け、「覚悟！」と大上段に振りかぶる。すると、そこにいたのは屋台を引く夜鳴き蕎麦屋の男だった。

「なぜその方、パタパタと戸を叩く？」

「いえ、戸を叩いちゃおりません。洪団扇で七輪のケツを扇いでいるのです」

「なるほど、たしかに手を添えて七輪を扇ぐとパタパタと音がする。ではなぜ『おすわどくん』と大きな声を出すのじゃ？」

「いえ、客を呼び込むために『お蕎麦うどくん』と言っているだけでございます」

「何と？」

「おそばうどくんでございます」

「おそばうどくんであるか。おそばうどくん、おそばうどくんで、おすわどんか？」

「おすわどん？ それは一体何のことですか？」

「どうでもよい。しかしこの荒木又スレ、上州屋に頼まれて参っ

た。某も手ぶらでは帰れん。その方の首をもらおう」

「冗談を言っただけじゃないですか。手前は何か悪いことはしておりません」

「いや、首をもらおう」

「息子じゃいけませんか？」

「息子だと？ 息子でもよいから早く出せ」

「これでございます」

「何だこれは？」

「蕎麦粉です。蕎麦屋の子で蕎麦子」

「たわけめ、こんなものをもらって何とする」

「ですから手打ちになさいませ」

手

打ち蕎麦で手打ち、いいオチです。江戸の下町の夜の様子もよく描かれています。冬の晩は、寒いですから温まって寝ようというのは人情です。そこを当て込んで屋台の夜鳴き蕎麦屋が現れます。売り声は「お蕎麦うどくん」です。

上州屋は後添いにおすわどんを迎えたばかり。さては先妻の幽霊が化けて出たのか……となり、荒木又スレ先生の登場となるのです。「又スレ」は剣豪荒木又右衛門のシャレですが、又スレ先生がこの嘶に一層ユーモアを添えています。

ビックリしたでしょう。そうです。冬にも怪談嘶はあるのです。